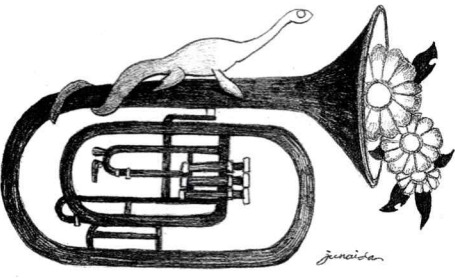


朝日 歌壇 俳壇



junaida <日曜日のブローチ 45>

◆長谷川 權選

百姓の顔して村の癩癩(らしか)迎(むか)かな
 (霧島市) 秋野 三歩

雪国に疎開(そくわい)したまま八十年
 (仙北市) 安部 哲男

哀(あは)しみの宿る枕(まくら)の余寒(よせむ)かな
 (長崎市) 下道 信雄

戦争(せんそう)のしやぶる地球(ちきゅう)の寒(さ)かな
 (福島県伊達市) 佐藤 茂

空港(くうこう)に落葉(らくが)のごとく眠(ね)る人
 (市川市) 山本 明

貝(かい)になりたかつた兵(へい)や校員(がういん)
 (大村市) 小谷 一夫

百年(ひゃくねん)の計(けい)なき国(くに)に梅(うめ)ひらく
 (入間市) 木嶋 務

白鳥(しらとり)が引(ひ)けは(は)濛濛(ももも)重機(じゆうき)来る
 (栃木県壬生町) あらあひこし

白鳥(しらとり)がまたる内(うち)の茂吉(しげきち)の忌(い)

(相馬市) 根岸 浩一

白梅(しらばい)や今(いま)さう清(きよ)く生(な)きられぬ
 (日進市) 松山 眞

【評】一席。のどかなお顔なのだ。村人の一人のように。二席。疎開先に住み着いてしまった。八十四歳。三席。「妻が病で施設に」とある。こんなとき、俳句の力が試される。十句目。そうとばかりもいえない。いくつになろうと。八十二歳。

◆大串 章選

忘れ物(わすれもの)取りに来(き)しごと寒(さ)良(よ)る
 (伊丹市) 保理江順子

聖火(せいふ)消(け)え戦(せん)火(か)は消(け)えず春(はる)愁(しゅう)ふ
 (前橋市) 萩原 大空

戦(せん)後(ご)生(な)まれ戦(せん)前(ぜん)に近(ちか)かん梅(うめ)白(しろ)し
 (福岡県川崎町) 萩尾 節子

病(びょう)癒(ゆ)え生(な)れ交(ま)はりて春(はる)を待(まち)つ
 (前橋市) 萩原 葉月

春(はる)の日(ひ)を滋(し)養(や)に母(はは)の癒(ゆ)えにけり
 (さいたま市) 齋藤 紀子

百案(ひゃくあん)にまざる下(した)萌(も)しかと踏(ふ)む
 (合志市) 坂田美代子

汽(き)車(しゃ)に乗(の)るたゞそ(そ)れだ(だ)けの春(はる)の旅(たび)
 (八幡市) 吉川せい子

もう二(に)度(ど)と会(あ)えぬ人(ひと)なり春(はる)の宵(よ)

(広島市) 藤井 擴

青(あお)い空(そら)紅(こう)白(しろ)梅(うめ)の絶頂(てつてい)期(き)

(横浜市) 田斐荘龍夫

投稿(こうこう)と云(い)ふ宝(たから)くじ春(はる)を待(まち)つ
 (福島県伊達市) 佐藤 茂

【評】第1句。「忘れ物取りに来しごと」がおもしろい。一体なにを忘れたのだろう。第2句。ミラノでの冬季オリンピックは無事終了したが、米国・イスラエルとイランの戦争は終わらない。第3句。戦争の無い時期を生き抜き一生を全うしたい。

◆高山れおな選

子(こ)持(も)猫(ねこ)白(しろ)髪(かみ)を毟(むし)めてくたすつた
 (神戸市) 豊原 清明

ふと見(み)れば光(ひかり)の午(ひる)後(ご)に春(はる)の雪(ゆき)
 (玉野市) 北村 和枝

何(なに)も彼(かれ)も落(お)ちちゆくさまに凍(こ)凍(こ)る
 (長野市) 縣 展子

猫(ねこ)の恋(こい)八百屋(やっぴや)お七(しち)の物語(ものがたり)
 (大村市) 小谷 一夫

時(とき)雨(あめ)るるや句(く)作(さく)発(はつ)酵(こう)するを待(まち)つ
 (草津市) 佃 恵美子

春(はる)めくく銀(ぎん)盤(ばん)の人(ひと)みな眩(くら)し
 (彦根市) 林 まこと

雪(ゆき)解(と)ける音(ね)を探(たづ)んに彼(かれ)の村(むら)へ
 (旭川市) 齊藤 洋子

片(かた)言(ご)を何(なん)度も言(い)わね春(はる)炬燵(たきだこ)
 (新潟市) 江端 妙子

姐(あね)の海(うみ)風(かぜ)の中(なか)に海(うみ)がある
 (相模原市) 川嶋 克弘

陽炎(かげろう)の裏(うら)側(がわ)にある余(あま)白(しろ)かな
 (霧島市) 秋野 三歩

【評】豊原さん。子持猫は孕み猫か、あるいは子育て中の母猫か。自他を越えた生の隣のようなものを感じさせる句だ。北村さん。中七末で切って読む。まだ雪が降っていながらも思いかげず明るくなってきた。縣さん。自然の中の静止画像。

◆小林 貴子 選

浅瀬(あさせ)舟(ふね)灯(あかり)列(り)ね日(ひ)の出(で)待(まち)つてをり
 (津市) 中山 道治

風(かぜ)花(はな)をふきこしと呼(よ)ぶ園(園)境(ぎょう)
 (前橋市) 和田 明

早(はや)春(はる)の海(うみ)に光(ひかり)の釘(くわ)を打(う)つ
 (三田市) 大川 宣子

実(じつ)相(さ)観(かん)人(ひと)今(いま)こそ真(ま)似(に)ん茂(しげ)吉(きち)の忌(い)

(高岡市) 野尻 徹治

二(に)月(げつ)尽(じん)ちくわ(ちくわ)パン(ぱん)買(か)う二(に)三(さん)つ
 (北海道当別町) 古川 周三

寒(さむ)卵(たまご)予(よ)測(そく)不(ふ)能(にや)の世(よ)に對(たい)ふ
 (石川県能登町) 瀧上 裕幸

広(ひろ)場(ば)にて創(そ)作(さく)タ(タ)ンス(ンス)あ(あ)た(た)か(か)し
 (和歌山県紀美野町) 神野 一馬

春(はる)節(ふし)や豚(とん)頭(づか)は家(いえ)包(た)に
 (淡路市) 中尾 菲出

さ(さ)くら餅(もち)食(た)べて食(た)べさせ母(はは)介(かい)護(ご)

(名古屋市) 木保 正幸

ね(ね)この日(ひ)のあ(あ)る日(ひ)本(ほん)に生(な)ま(な)れ(れ)けり
 (新潟県弥彦村) 熊木 和仁

【評】一句目、朝の海へ動きに出る。その光景が丹念に詠われた。二句目、風花を「吹越」と呼ぶ群馬県。加藤徹郎に句集『吹越』あり。三句目、太陽光が一筋、突き刺さるかのよう。四句目、斎藤茂吉の目指した境地は、いかにも奥が深い。

うたをよむ 東日本大震災から15年

梶原さい子

東日本大震災から十五年。ついでこの間のことのように感じられる一方、確実に月日は流れており、この数年の短歌にもその変化がいよいよ映りてきている。モニタリングポストは車のなかに古り折らるるものに姿似てゆく

小林真代「4766日目」
 原発事故後、放射線量を測定するために設置された「モニタリングポスト」は、草に埋もれ、偶像(おぼろ)のようになりつつある。教室は災後生まれに満ち溢れ私を語り

部へと押し上げる
 武田生歌「NHK短歌」2022.5.6
 震災を知らない世代に、どう伝えていくか。経験した者としての使命感が「語り部」という表現につながった。むろん。時間が経っても変わらない状況。中問とふ名を持つ廃物仮置場。最終処分場は決まらず。吉田信雄「うた新聞」2022.4.3
 あの日から

理不尽なことは理不尽のまま
 斉藤梢「短歌」2022.4.5
 除染土の最終処分場は、いまだ決まっていない。また、震災で奪われた命へのやりきれなさも消えない。それでも、震災の「せいじで」と思ってたが今では時間が「おかげで」に変えて半澤トヨ子「朝日新聞みちのく歌壇」2022.6.3.7

作者は、福島県双葉町から別の土地に避難した。これまで困難がたたくさんあったと思われるが、今、震災の「おかげで」と言えることに救われる。十五年という歳月が、なした一つである。(歌)

宗教学者・鎌田と歌人・笹の対談集。「言霊」という視点から和歌や短歌の歴史を捉え直す。巻頭に両者の歌も収録。(KADOKAWA・2860円)

◇朝日歌壇 入選取り消し 3月8日付の歌壇に掲載した「地図にない山から先に笑い出す見知らぬ人と駅から眺む」は、同じ作者による類似作品がすでに発表されていたので入選を取り消します。

☆は共選作。入選作はデジタル版などに掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が差別する場合があります。郵便での投稿は無地のほかき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。